

34. 生態学研究センター

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 95)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 96)

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

インパクト・ファクターが5以上の学術誌に掲載された論文数は、第2期中期目標期間と比較して第3期中期目標期間には増加している。また、Nature 誌、Proceedings of the National Academy of Sciences 誌、Nature Communications 誌、Nature Plants 誌など、トップジャーナルへの論文掲載数も第2期中期目標期間と比較して増加しており、これらの論文の筆頭著者は学生やポスドクなどの若手研究者である。

〔優れた点〕

- 文部科学省・科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会が全国の国立大学の共同利用・共同研究拠点を対象に実施した平成30年度の間評価において、生態学研究センターの拠点（医学・生物学系に含まれる）はA評価であった。
- 生態学研究センターから発表された論文の総数は、第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）と比較してほぼ同レベルを維持している。一方、Impact Factor (IF) が5以上の学術誌に掲載された論文数は、第2期中期目標期間（9報）から第3期中期目標期間（48報）にかけて大幅に増加した。また、IFが7以上のさらに高いランクの学術誌の掲載論文数は、平成28年度以降は増加傾向にある。特筆すべきは、Nature、Proceedings of the National Academy of Sciences、Nature Communications、Nature Plants など、学術界の広い範囲の研究者に認知されたトップジャーナルへの論文掲載数が前回と比較して大幅に増加し、さらにこれら論文の筆頭著者は大学院生やポスドクなどの若手研究者である。

〔特色ある点〕

- 大学にある基礎生物学の理学系研究施設としては珍しく、京都大学を通じて民間企業と正式な契約を結んだ共同研究をスタートさせた。これにより、民間企業からの研究資金を得て、共同研究を推進している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。